

広基

観世弥次郎作

| | | | |
|----|----|--------|------|
| 季は | 地は | ツレ | 津軽時則 |
| 雜 | 陸奥 | トモ | 同従者 |
| | | ツレ | 安原秀房 |
| | | ヲカシ | 同従者 |
| | | ツレ（女） | 白拍子 |
| | | シテ | 津軽広基 |
| | | ツレ（寄手） | 敵兵 |
| | | トモ | 敵の従者 |

時則

「かやうに候ふ者は。奥州の住人津軽の太郎時則にて候。さても某が一族に。津軽の六郎広基と申す者の知行隣郷にて候ふ処に。安原の豊後守と申す者違乱仕り候ふにより。彼広基罷り越し。其違乱故なきよし申し候ふ処に。子細に及ばず召捕られ籠者の身と成りて候。一族の事に候ふ間口惜しさ申すばかり無く候。去りながら合戦に及び候はゞ。広基やみくと誅せられ候はん間。皆々召し集め談合せばやと存じ候。皆々渡り候ふか。

トモ

「御前に候。

時則

「談合申すべき事の候。何れもかう渡り候へ。

トモ

「畏つて候。

時則

「さても六郎広基が事は候。口惜しさ申すばかりなく候。但し其掛合矢一つ射かけん事は易けれども。さやうに候はゞ。即ち六郎は暗々と誅せられん事。其曲あるまじく候ふ程に。所詮如何やうにも計略

を以て。彼者を取り返さばやと存じ候ふは如何に。

トモ「げにくさやうの御了簡尤然るべく候。

時則「さて如何やうなる謀を以て。やすくと取り返し候ふべき。

トモ「皆々御存分の御意見あらうずるにて候。先づ某は

屹度案じ出だしたる事の候。此頃世上にもてはやし候ふは白拍子にて候ふ間。然るべき女を白拍子に成され。小さき刀を隠し持たせられて。かの安

原が館へ遣はされ候ふべし。彼者は女に心を愛でたる者にて候ふ程に。定めて対面仕り候はんずる時酒を進め。酔ひ臥し皆々由断仕り候はんずる隙に。夜更けて彼女籠中へ刀を渡し。いましめをも籠のくわんぬきをも切り折り出で給はゞ。即ち我等おのく路次まで行き向ひ候ふべしと。かたく仰せ合せられ候ふべしと存じ候。

時則「げにく是は尤の御了簡にて候。さらば之に定め

うするにて候。

トモ
「然るべう候。

トモ
「いざくさらばと兵は。

時則
「其樊於期が謀にも。

地
「劣らじ物と白真弓。く。やたけ心も一しほに。
恐ろしや。笑の内なる其刀。心にこめて多かりし。
此偽や頼むらん。く。

安原
「是は奥州の住人。安原豊後守秀房と申す者にて候。

こゝに同国の人。津軽の六郎広基と申す者。勘
氣を致す子細あるにより。からめ捕り籠者せさせ
て候。彼者大剛の者にて候ふ間。籠中番の事かた
く申し付けばやと存じ候。誰かある。

ヲカシ
「御前に候。

安原
「かの籠中の番の事。油断なう皆々仕り候へと。堅

う申し付け候へ。

ヲカシ
「畏つて候。

女 「如何に案内申し候。

ヲカシ 「案内とは誰そ。

女 「さん候是は此国の白拍子にて候ふが。承り及びて遙々是まで参りて候。御心得を以て見参に入れて給はり候へ。

ヲカシ 「委細承り候。暫く御待ち候へ。御見参あらうずるは存ぜねども申し入れて見うするにて候。

女 「然るべきやうに頼み参らせ候。

ヲカシ 「心得申し候。如何に申し上げ候。

安原

「何事ぞ。

ヲカシ 「案内申さうすると申し候ふ程に。罷り出で候ふ処に。やがて此国の白拍子にて候ふが。殿様の御事を承り及びて。御礼の為めに参りて候ふが。私が心得を以て御目に懸けて呉れよと申し候。

安原 「如何やうなる者ぞ。

ヲカシ 「前々かなたこなたより参りて候ふよりも。是は一

段みめかたちも美しき白拍子にて候。

安原

「用心を致す時分にて。誰にても見参申さねども。遙々來りたらばそと逢うて。一飲ませ申さうずるにてあるぞ。こなたへ召し候へ。

ヲカシ

「畏つて候。聞し召され候ふぞ御前にて一つ御謡ひ候へ。

女歌

「過ぎ来にし。程をば捨てつ今年より。千代は数へん住吉の。松にぞ君が命をも。何れ久しと限らん。

く。

安原

「近頃面白う謡うて候。とてもの事に面白い小唄をうたうて。そと一さし舞を所望し候へ。

ヲカシ

「畏つて候。なふく事の外の御機嫌にて候。とのもの事にけうがる小歌を御謡ひ候ひて。そと一さし御舞ひ候へ。

小歌地

「花摺衣立ち寄る波の。川ぞひ柳のいと永き。春の円居もさまぐの。流に引かるゝ盃も。くる

りく。くるくくるく。くるくく。く

るりくくるくくと。廻るも遅き春の日の。

曇らぬ御代ぞめでたき。

シテサシ

「猛虎深山にある時は。百獸をのゝき。檻囲の内に
ある時は。尾を動かして食を求む。さばかり猛き
心も今。骨肉疲るゝ籠中の。思ひの闇を如何にせ
ん。

女 「如何に籠中へ申すべき事の候。

シテ
「既に此夜も深更の。人音絶えて静なるに。密かに
女の声は。如何なる人にて有るやらん。

女 「是は津軽の太郎時則の御使に。白拍子となりて來
りつゝ。豊後の守に酒をすゝめ。各酔ひ臥し給ひ
ける。其隙なれば参りたりと。籠のあたりの戸を
明け見れば。

地 「千筋の縄もさまぐの。さも恐ろしきいましめに。
心も消えくと。胸打ち騒ぐばかりなり。かくて

有るべき事ならねば。時刻を移さじと。さばかり
隠し持ちたりし。刀を抜いて立ち寄り。皆一門も
御迎へに。來り給はんとばかりを。云ふも程ふる
いましめを。切り解けば其時に。刀を取つて水鳥
の。立ち上り則ち。大勢力の力を致し。くわん
ぬきを押し切り。えいやと押され。もろくも碎け
て四方へのけば。かしこへ走り出で。かゝる情は
大磯の。虎にも劣らぬ遊女を伴なひ。毒蛇の口を

遁れ行く。／。

時則「や。さればこそあれ／＼見給へ人々よ。かの白拍
子を伴なひて。広基是へ来るぞや。

地「是や胡国に移されし。蘇武を二度故郷に取り返
し。やうりが涙も。今更思ひ白雲の。立ち重な
れる嶺分けて。急ぐ心も勇みあり。／＼。
如何に申し候。はや山中を抜群に分け越して候。
あらめでたや。今は我人の本望之に過ぎず候。

シテ

「仰の如くかゝる御芳志申し尽し難う候。かやうの

御武略は。しかしながら八幡大菩薩の御加護とこ

そ存じ候へ。先々此女を必世に立てうずるにて候。

時則 「げにくゆゝしき働きにて候。やがて褒美致し候

ふべし。心安く思ひ候へ。誰がある。

ヲカシ 「御前に候。

時則 「此者を乗物にて静に先へ返し候へ。

ヲカシ 「畏つて候。

時則 「こなたへ渡り候へ。殊の外の難所にて候。こなた
の道へ渡り候へ。

シテ 「承り候。

トモ 「如何に申し候。広基を討ちとめ申さんとて。猛勢
を以て跡より谷々嶺々を分つて。闘をつくり駆け
寄せ來り候。

時則 「げにく闘の声聞え候。本より覺悟にて候。さら
ば此よきせつしよにて候ふ間。皆々あのかさへ陣

を御取り候へ。

シテ
「承り候。」

時則
「まづく広基具足を召され候へ。」

シテ
「心得申し候。如何に太郎殿へ申し候。此合戦も我等故の事にて候ふ程に。先づ某真先に討死仕り候ふべし。皆々は此山を堅く御持ち候へ。我等は駆け向ひ一合戦仕らうずるにて候。」

時則
「仰はさる事にて候へども。たゞ某に御任せ候へ。」

さすがに数度の合戦。かうあわて給ひ候はゞ利を失ふべし。時則が下知に従ひ給はゞ。皆々に高名させ申さん。たゞ此山を堅く御持ち候へ。

シテ
「げにく仰せ尤にて候。」

寄手一声
「誘ひ行く。花を嵐の遠近も。霞隔てゝ待てしばし。」

時則
「御覧候へ向ひの嶺へ軍勢を打ち上げて見え候。かまへて聊爾にこなたより御かり候ふな。只此山まで敵の着かうする間はひとつと静まり。此嶺へ

攻め上らん時。えいやと云ふを合図にて。一度におろし合はせつゝ。あの谷へ悉く切りはめ候ふべし。

シテ
「尤にて候。

寄手
「あれ／＼広基が勢を見かけ。一定合戦をせうずると見えて。ちとものかずよきせつ所に陣を取り堅め。ひしと静まつて見えて候。まづ／＼こなたより言葉を掛けうずるにて候。

トモ
「然るべう候。

寄手
「如何に津軽の六郎殿。まさなくも総角を見せ給ふ物かな。心は知るや荒磯波の。返せや返せと呼ばりけり。

シテ
「其時広基進み出で。今の無念の憤りを。是にて晴

らさん來り給へと。扇を上げて招きければ。

地
「我も／＼と面々に。遙の谷峰岩石を。凌ぎ上つてこなたの峰へ。皆一同にぞかりける。

シテ
「広基はてうきの如くに。

地
「広基はてうきの如くに。えいやと大勢おろしあひ。

しのぎを削つて戦ひければ。さしもに進みし兵も。
遙の谷へ切り落されて。一騎も残らず失せにけり。

地
「安原之を見るよりも。く。かしこの嶺より横合

に。広基を目がけてかゝれば。主君を討たせじと。
表に進む若武者の。まつかう打ち割り広基に向へ
ば。好む敵と太刀取り直し。詰めつ開いつ戦ひけ

るが。打物投げ捨てむんずと組んで。えいやと投
げ伏せ峨々たる谷を。上になり下になりころび落
ちて。安原を押し付け首搔き切つて。引つ提げ出
でゆく深谷の水の。縄目の恥をばかうこそ雪げと。
勝闘つくつて帰りけり。